徳保環セ年報　№28　49－55（2010）

感染症発生動向調査による徳島県の患者発生状況（平成21年）

徳島県保健環境センター
嶋田　啓司・石田　弘子・浜口　知敏

Infectious diseases surveillance reports in Tokushima Prefecture in 2009

Keiji SHIMADA, Hiroko ISHIDA and Chitoshi HAMAGUCHI

Tokushima Prefectural Institute of Public Health and Environmental Science

Ⅰ　はじめに

感染症発生動向調査事業は，「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」において，感染症に対する事前対応型対策の一つとして感染症の蔓延を未然に防止することを目的に実施されている。

当所は「徳島県感染症発生動向調査事業実施要綱」に基づく徳島県感染症情報センターとして，医療機関等の協力により徳島県における感染症発生情報を収集し，解析を行っている。そして，解析した情報をもとに週報や月報を作成し医療機関や市町村等へ広く還元することにより，感染症の拡大防止や公衆衛生の向上に努めている。今回，平成21年１月から12月までの感染症患者発生状況についてまとめたので報告する。

Ⅱ　方法

感染症発生動向調査における患者届出対象疾患は，「感染症の予防及び感染症患者に対する医療に関する法律」により指定されている全数把握対象疾患76疾患，指定届出機関から届出を受ける五類定点把握対象疾患25疾患，厚生省令で定める疑似症を対象とした。

感染症発生情報は，定点把握対象疾患のうち内科，小児科，眼科及び基幹定点週報分は月曜日から日曜日までを１週間単位で，性感染症定点及び基幹定点月報分は月単位で集計を行った。

Ⅲ　結果

１　全数把握対象疾患の届出状況（表１）

⑴　一類感染症

一類感染症の届出はなかった。

⑵　二類感染症

二類感染症は，結核が198件届出られ，月別の届出数は９件～26件で推移した。

年齢別では60歳以上が全体の約６割を占め，年齢が高くなるのに伴い届出数が多くなる傾向が見られた。また，20歳代，30歳代の若年層が占める割合が19.7％と昨年（9.7％）の約２倍に増加した。それら若年層を職業別にみると医療・介護関係従事者や海外からの研修生などが多く，院内感染が推定される例も見られた。

症状別では，患者（死亡（疑い）例も含む）164件（内訳：肺結核108件，その他の結核49件，肺結核およびその他の結核７件），疑似症患者３件，無症状病原体保有者31件であった。

表１　全数把握対象疾患の届出数

類型	疾病名	平成21年	前年
二類	結核	198	217
三類	腸管出血性大腸菌感染症	18	13
四類	A型肝炎	1	0
	つつが虫病	3	0
	日本紅斑熱	3	2
	マラリア	1	0
五類	アメーバ赤痢	5	2
	クロイツフェルト・ヤコブ病	1	0
	後天性免疫不全症候群	4	2
	梅毒	2	1
	破傷風	1	1
	麻しん	2	3
	新型インフルエンザ*1)	310	

*1)届出対象：全ての患者及び疑い患者（H21．7．23まで）
集団発生に関連する患者のみ（H21．8．25まで）
定点把握対象感染症へ変更（H21．8．26より）

⑶　三類感染症

三類感染症は，腸管出血性大腸菌感染症18件の届出があった。過去５年間の届出数は，集団発生のあった平成18年を除くと年間13～19件で推移している。月別の届出数は，例年，６～９月の気温の高い時期に多かったが，今年は気温の下がりかけた９月～11月に14件（77.8％）と集中した。

年齢別では５歳未満（４件），10歳代（５件）が多く，重症の合併症である溶血性尿毒症症候群（HUS）も10歳代より１件報告された。

各事例における感染経路や感染源は，本疾患の潜伏期間が２～14日と比較的長いこともあり特定には至らなかったが，発症前に生レバーの喫食や焼肉店を利用していた事例が４件見られた。

⑷　四類感染症

①　A 型肝炎

A 型肝炎は２月に１件の届出があった。過去５年間の届出数は年間０～２件で推移し，すべて70歳以上の高齢者であった。

②　つつが虫病

つつが虫病は３件の届出があった。過去５年間の届出数は年に０～１件で推移し，報告月は発生が多いとされる秋～春先に集中している。

年齢層はすべて農作業，森林作業など野外作業の機会が多い50歳以上の中高年者であった。推定感染地は県内であり，予防のための啓発の徹底が重要である。

③　日本紅斑熱

日本紅斑熱は３件の届出があった。届出数は過去５年間，年間１～５件で推移しており，報告月は発生が多いとされる春先から秋に多い。つつが虫病と同様に，推定感染地は県内，感染者はすべて農作業など野外作業機会の多い70歳以上の高齢者であり，啓発の徹底が重要である。

④　マラリア

マラリアは７月に１件の届出があった。病原体別は不明で，推定感染地はインドネシアであった。

⑸　五類感染症

①　アメーバ赤痢

アメーバ赤痢は５件の届出があった。

性別では，男性４件，女性１件，年齢別では30代２件，40代２件，50代１件であった。いずれも推定感染地は国内であり，推定感染経路は，性的接触１件，経口感染１件，不明３件であった。

②　クロイツフェルト・ヤコブ病

クロイツフェルト・ヤコブ病は１件の届出があった。70代男性であり，病型は孤発性プリオン病であった。過去５年間の届出は，０～３件で推移している。

③　後天性免疫不全症候群

後天性免疫不全症候群は４件の届出があった。過去５年間では，年間０～３件の届出数であった。

年齢は20代，30代が各１件，40代が２件であり，病型はいずれも「無症候性キャリア」であった。推定感染経路は，性的接触２件，不明２件であった。

全国的には，HIV/AIDS ともに報告数が増加傾向にある。今後もハイリスク層や検査を受けていない20～40代を中心とした幅広い年齢層に対し，より積極的な普及啓発を推進し，HIV 感染の早期発見による早期治療と感染拡大の抑制に努める必要がある。

④　梅毒

梅毒は２件の届出があった。30代および50代の男性で，病型は「晩期顕症梅毒」１件，「無症候」１件であった。推定感染経路は異性間性的接触であり，推定感染地域は国内１件，中華人民共和国１件であった。

⑤　破傷風

破傷風は１件の届出があった。過去５年間の届出数は０～３件で推移しているが，年齢層はすべて60歳以上である。中高齢者を中心に破傷風に関する啓発が必要である。

⑥　麻しん

麻しんは４月，12月に２件の届出があったが，いずれも感染の拡大は見られなかった。

年齢層は10代であり，ワクチン接種歴および病型は，１回のみ接種（麻しん：臨床診断例）と２回接種済み（修飾麻しん：検査診断例）であった。平成24年までに麻しん排除することを目標に，啓発の強化を進めている。

⑹　新型インフルエンザ等感染症

①　新型インフルエンザ（AH１pdm）

新型インフルエンザ（AH１pdm）は，７月23日（届出対象：全ての患者及び疑い患者）までに41件，８月25日（届出対象：集団発生に関連する患者のみ）までに269件と，定点把握対象感染症へ変更（８月26日）されるまでに計310件の届出があった。

年齢は10歳未満が57件，10代157件，20代62件，30代17件，40代８件，50代８件，60代１件であり，20代以下の若年層が約９割を占めた。

２　定点把握対象疾患の届出状況（表２）

⑴　インフルエンザ（鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く）

新型インフルエンザ（AH１pdm）が流行したため，年間報告数は21,983件と前年（5,487件）の約４倍に増加し，流行状況も例年とは異なる傾向が見られた。本年の前期流

表２　内科，小児科，眼科定点報告対象疾患の週別報告数

週	期　間	インフルエンザ	RSウイルス感染症	咽頭結膜熱	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	感染性胃腸炎	水痘	手足口病	伝染性紅斑	突発性発しん	百日咳	ヘルパンギーナ	流行性耳下腺炎	急性出血性結膜炎	流行性角結膜炎
1	12／29～	160	35	18	22	202	52	3		12			2		
2	1／5～	402	16	11	37	191	35			11			2		
3	1／12～	595	20	2	22	234	26	2	1	9		1	4		1
4	1／19～	1,020	19	7	30	217	32		4	12			1		1
5	1／26～	1,098	22	6	25	176	22	1	1	11			2		1
6	2／2～	881	7	5	16	148	21		1	9			2		
7	2／9～	825	9	10	31	157	58	1	5	8			1		2
8	2／16～	514	6	8	26	105	25	2	1	13					3
9	2／23～	805	4	17	21	160	43			10			4		2
10	3／2～	955	3	8	30	171	45			12	1		3		1
11	3／9～	772	13	8	24	161	45			10	3		2		
12	3／16～	582	3	7	29	124	44		1	17	1		3		
13	3／23～	255	5	10	16	178	37			14	1	1	2		
14	3／30～	132	10	2	15	218	38			11	1	1	3		
15	4／6～	61	8	11	26	198	32	2		8	1		2		
16	4／13～	80	5	7	25	259	25	4		6					1
17	4／20～	83	4	6	22	243	20		1	12			3		1
18	4／27～	55	1	12	25	197	32	4		14			1		1
19	5／4～	36	1	3	25	206	25	9		15		1	2		
20	5／11～	30	2	2	25	204	41	8	3	13	2	2	7		
21	5／18～	33	2	8	24	205	22	1	1	14		1	1		2
22	5／25～	9	1	7	23	167	33	7		17			11		
23	6／1～	4	2	5	32	122	20	9		16		5	7		1
24	6／8～	7	1	5	32	127	32	8	1	21	1	2	3		1
25	6／15～	2		9	32	83	36	13	2	18		5	17		1
26	6／22～	5		6	31	66	28	14		13	1	7	3		
27	6／29～	5		5	17	64	20	9		27		4	1		
28	7／6～	5		6	17	58	19	22	2	17		15	4		
29	7／13～	6		8	26	64	33	30	1	14		11	10		
30	7／20～	4		9	20	73	28	18		18		36	4		
31	7／27～	6		7	17	70	42	37		19	3	38	12		
32	8／3～	12		2	16	58	17	27		12	2	28	10		
33	8／10～	40	1	7	10	60	32	39		12	1	36	10		
34	8／17～	108	1	3	4	68	29	38		12		25	19		
35	8／24～	90	4	1	10	46	16	29	1	5		41	14		
36	8／31～	66	4		6	58	16	55	1	20		49	17		
37	9／7～	32	1		9	60	21	47	1	17		33	16		
38	9／14～	27	9		11	32	14	22		11	1	24	16		1
39	9／21～	49		1	7	35	7	7		8		7	7		
40	9／28～	64	1		7	50	20	2	1	14		16	14		2
41	10／5～	121	3		4	39	8	12		6		18	15		
42	10／12～	230	9		10	30	19	16		14		9	10		
43	10／19～	318	6	1	5	54	13	8		13		2	17		1
44	10／26～	545	2	2	12	38	22	3		18		1	13		
45	11／2～	656	3		4	47	10	5	1	19		1	18		
46	11／9～	1,135	7	3	11	47	33	2		16		1	8		
47	11／16～	1,603	12	2	8	52	32	8		13		4	14		
48	11／23～	1,848	7	1	7	47	32	8	1	7			12		
49	11／30～	1,888	7	3	9	43	33	6		12		1	8		
50	12／7～	1,544	17	2	13	48	38	3		9		1	14		
51	12／14～	1,125	36	4	12	97	33			9			16		
52	12／21～	733	39	7	5	129	34	1	3	8		2	7		
53	12／28～	322	30	2	2	151	23	2		10			5		1
合計		21,983	398	276	945	6,137	1,513	544	34	686	19	429	399	－	24

行（平成20年/平成21年）は，平成20年第49週（1.05件/定点）から流行が始まり，平成21年第５週（28.89件/定点）にピークを迎え，第８週（13.53件/定点）まで漸次減少したものの再び増加しはじめ，第10週（25.13件/定点）に２つ目のピークを形成した。前年と比較すると，１つ目のピークの時期，高さはほぼ同じだったが，２つ目のピークがはっきりと認められた点が例年と異なっていた。後期流行（平成20年/平成21年）は，新型インフルエンザ（AH１pdm）の流行によるインフルエンザであったが，流行開始が９月中旬（第39週）と例年より早く，11月下旬（第49週：49.68件/定点）にピークとなり，その後減少傾向となった。

年齢層別報告数では，４歳以下16.2%，５～９歳33.7%，10～14歳25.2%，15～19歳8.4%，20歳以上16.3%と，前年に比べ10歳代の報告割合が大きく増加したが，これは後期流行の原因ウイルスである新型インフルエンザ（AH１pdm）が10歳代で広く流行したために，相対的に割合が増加したと考えられる。

⑵ RSウイルス感染症

年間報告数は398件であり，前年より26.6%減少した。前期流行（平成20年/平成21年）は平成20年第50週頃より始まり全国平均より高めで推移したが，春に向かってしだいに減少した。後期流行（平成21年/平成22年）では，12月上旬（第50週頃）より増加傾向となり流行が始まった。本年は，昨年流行が見られた夏の終わりから秋にかけての時期に報告数の増加は見られず，例年と同様に冬期に多く発生した。

年齢層別報告数では，０歳46.4%，１歳29.4%，２歳18.0%，３歳以上3.7%であり，０歳の報告が最も多く，２歳以下が約９割を占めており，乳幼児に多発する傾向が見られた。

⑶ 咽頭結膜熱

年間報告数は276件であり前年と比べ56.4%減少した。過去５年間では平成19年に次いで少ない報告数であった。本疾患は４月頃から増加しはじめ７～８月にピークを示し，秋と春にも小さなピークが見られたり小規模な流行が続いたりすることもあるとされる。本年は，前年の秋からの流行を受けはじまったが，0.3件/定点を増減しながら推移し，前年に見られた夏の大きな流行は見られなかった。９月以降も報告数の少ない状態で推移し，0.2件/定点以下で経過した。

年齢層別報告数では，１歳以下27.1%，２～３歳28.9%，４～５歳22.1%，６～７歳15.2%，８歳以上6.5%であり，５歳以下が約８割を占めた。

⑷ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

年間報告数は945件あり，前年と比べ35.1%減少し，過去５年間では最も少ない報告数であった。本疾患は冬季および春から初夏にかけて報告数が増加するとされ，本県でもその傾向が見られたが，昨年より低い水準で推移した。また，全国平均と比較しても１年を通じて報告数は下回っていた。

いずれの年齢層でも報告されているが学童期の小児に最も多いとされており，年齢層別報告数は２～３歳で17.9%，４～５歳34.7%，６～７歳22.3%，８～９歳9.6%，10～14歳8.1%と本県においても同様の傾向が見られた。

⑸ 感染性胃腸炎

年間報告数は6,137件あり，前年に比べ20.5%減少した。過去５年間では，平成17年に次いで少ない報告数であった。本疾患は，初冬から増加し始め12月頃に一度ピークができた後，春にもう一つなだらかなピークができ，その後，夏から秋に向けて緩やかに減少するとされる。本年の前期流行は，前年11月（第47週頃）から始まったが報告数が10件/定点を超える週がほとんどなく経過した。そして３月下旬（第13週頃）からやや増加し，第16週（11.26件/定点）をピークとした後減少し，６月下旬～12月上旬にかけては報告数が２件/定点前後で推移した。後期流行では，前年は11月に入り増加しはじめたが，本年は12月中旬（第51週頃）になり報告数が増加しはじめ越年した。

年齢層別報告数は，０～１歳28.1%，２～３歳25.0%，４～５歳16.2%，６～７歳9.8%であり，乳幼児が多く，この傾向は前年および全国平均と同様であった。

⑹ 水痘

年間報告数は1,513件であり，前年と比べ23.9%減少し，過去５年間では平成19年に次いで少ない報告数となった。本疾患は年間を通して発生するが，主に冬から春に流行し夏から初秋に減少するとされる。本年の前半は昨年より低く推移したが，前年晩秋から冬季の流行に継いだ本年前期の流行は，1.5件/定点前後を増減しながら推移した後９月に入り減少しはじめ，以後低位で推移したが，冬季の流行にかけて報告数は増加した。

年齢層別報告数は，２～３歳が38.9%と多く，次いで４～５歳25.9%，０～１歳24.4%となり７歳以下の報告が大部分を占め，前年および全国平均と同様の傾向であった。

⑺ 手足口病

年間報告数は544件あり，前年と比べ43.3%減少した。過去５年間では平成19年に次いで少ない年であった。本年の発生状況は，５月上旬（第19週）頃より報告数がゆるやかに増加し９月上旬（第36週：2.39件/定点）にピークを示した後減少した。本年の流行ピークは前年のピーク（第26週：3.74件/定点）と比較すると，約10週遅くピークの

高さも低かった。

年齢層別報告数では，３歳以下からの報告が約75％と多くを占め，５歳以下では全体の97％となり，前年および全国平均と同様の傾向が見られた。

⑻　伝染性紅斑

年間報告数は34件あり，前年と比べ44.3％減少した。過去５年間では最も少ない報告数であり，大きな流行は見られなかった。本疾患は年始から７月上旬にかけて増加し，第30週頃ピークを示した後，減少するとされている。本年は，年間を通じて定点あたり報告数が0.25件以下で増減し，前年に続き流行は見られなかった。

年齢層別報告数では，９歳以下の報告が全体の約97％を占めた。

⑼　突発性発しん

年間報告数は686件あり，前年と比べ13.7％減少した。過去５年間は680件～850件で推移しており，各年の報告数の差はあまりない。本疾患は季節性が認められない感染症であり，年間を通じてほぼ一定の範囲内をスパイク状の増減を繰り返しながら推移するとされる。本年の推移も，前年とほぼ同じで季節的変動は見られなかった。

年齢層別報告数では，１歳以下が95.6％を占めており，前年および全国平均と同様の傾向であった。

⑽　百日咳

年間報告数は19件あり，前年と比べ54.8％減少した。過去５年間の報告数では，平成16年以降増加傾向にあったが，本年は減少となった。

年齢層別報告数では，１歳以下が52.6％と最も多く，次いで10～14歳21.1％，20歳以上15.8％であった。前年と比較すると，20歳以上の割合が小さくなり，１歳以下，10～14歳の割合が大きくなったが，これは20歳以上の報告数が大きく減少したため相対的に影響を受けたと思われる。

⑾　ヘルパンギーナ

年間報告数は429件あり，前年と比べ53.5％減少し，過去５年間では最も報告数が少なかった。本疾患は，夏季を中心に主に乳幼児の間で流行するエンテロウイルス感染症の代表的な疾患であり，本年の流行も７月中旬から９月中旬にかけて見られ，ピークは９月上旬（第36週：2.13件/定点）であった。前年と比較すると，流行開始およびピークとなった時期は約７週間遅くなっており，ピークの高さも前年のピーク（第29週：6.13件/定点）の約１/３と低かった。

年齢層別報告数では，１歳以下42.4％，２～３歳35.2％，４～５歳14.2％，６歳以上8.2％であり，５歳以下が約９割を占め，前年および全国平均と同様の傾向であった。

⑿　流行性耳下腺炎

年間報告数は399件であり，前年と比べ141.8％増加と約2.4倍の報告数となった。過去５年間は，流行が見られた平成17年，18年の報告数は多かったが，平成19年，20年では報告数は少なく大きな流行は見られていない。本年は，第１週～第19週までは，定点あたり報告数0.1件前後で推移していたが，その後は，増減しながら増加傾向となり，定点あたり報告数０.5件前後で推移した。前年と比較すると７月までほぼ同じ報告数で推移したが，８月以降は前年を上回った水準で推移した。

年齢層別報告数では，４～５歳が39.1％と最も多く，次いで２～３歳24.6％，６～７歳16.6％と，２～７歳の報告数が全体の約８割を占めた。

3　眼科定点報告対象疾患の動向

⑴　急性出血性結膜炎

平成21年は報告がなく，平成18年以降報告のない状況が続いている。

⑵　流行性角結膜炎

年間報告数は24件であり，前年と比べ36.8％減少し，過去５年間で最も少なかった。本年は２月中旬（第８週）に定点あたり報告数が0.75件となったが，それ以外の週の定点あたり報告数は０～0.5件で推移した。

年齢層別報告数では，20歳以上が87.5％，４歳以下8.3％，15～19歳4.1％を占めた。

4　基幹定点報告対象疾患の動向

⑴　週報告対象疾患

①　細菌性髄膜炎

平成21年は報告がなかった。過去５年間の報告数は，年１～２件で推移している。

②　無菌性髄膜炎

平成21年は報告がなかった。過去５年間の報告数は，年０～４件で推移している。

③　マイコプラズマ肺炎

年間報告数は６件あり，過去５年間の報告数は，年２～６件で推移している。本年は，６月，９月，11月に１～３件の散発的な報告があった。

年齢別では，５歳未満，10歳代，30歳代，40歳代，70歳以上であった。

④　クラミジア肺炎

平成21年の報告はなく，過去５年間においても報告はない。

⑵　月報告対象疾患（表３）

①　メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

年間報告数は378件（男性237件，女性141件）あり，前年に比べ5.0％増加した。

表３　基幹定点（月報）報告対象疾患の月別報告数

	メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	薬剤耐性緑膿菌感染症
１月	24	－	－
２月	23	－	1
３月	42	3	1
４月	29	1	－
５月	34	－	－
６月	29	－	－
７月	34	－	1
８月	36	1	1
９月	23	1	－
10月	28	－	1
11月	35	1	2
12月	41	4	－
合計	378	11	7
前年	365	15	3

表４　性感染症定点報告対象疾患の月別報告数

	性器クラミジア感染症	性器ヘルペス感染症	尖形コンジローマ	淋菌感染症
１月	10	1	5	6
２月	14	5	3	1
３月	8	9	7	－
４月	16	7	4	－
５月	12	7	6	2
６月	10	10	3	2
７月	12	10	8	3
８月	17	5	3	4
９月	16	4	1	12
10月	8	2	1	2
11月	12	8	2	2
12月	10	9	5	3
合計	145	77	48	37
前年	198	87	63	51

年齢別では50歳以上からの報告が多く，70歳以上の年齢層からの報告数が269件と全体の約７割を占めた。

②　ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

年間報告数は11件（男性９件，女性２件）あり，前年と比べ26.7％減少した。

年齢別では10歳未満が４件，70歳以上が３件であり，昨年と同様の傾向であった。

③　薬剤耐性緑膿菌感染症

年間報告数は７件（男性６件，女性１件）あり，前年（３件）より増加した。

年齢層はすべて60歳以上であった。

5　性感染症定点報告対象疾患の動向（表４）

(1)　性器クラミジア感染症

性感染症全体の半数を占め，平成17年以降増加傾向となっていたが，本年の年間報告数は145件（男性126件，女性19件）と前年より減少した。

年齢別報告数では，25～29歳の年齢層の報告数が最も多く，20，30歳代の報告が全体の75％を占めているが，10代前半からの報告もあった。中学生の段階から性感染症の予防教育や若年者の症状出現時に適切な受診行動につながるような，相談，検査体制の構築が重要である。

(2)　性器ヘルペスウイルス感染症

年間報告数は77件（男性56件，女性21件）であり，前年に比べ11.5％減少した。

15歳以上のすべての年齢層で報告があるが，20～39歳で全体の半数を占めた。また，60歳以上の報告数が21件あり他の性感染症と比較してこの年代に占める割合が多いが，高齢者では潜伏していたウイルスによる再発の可能性も考えられる。

(3)　尖形コンジローム

年間報告数は48件（男性42件，女性６件）であり，前年（63件）に比べ23.8％減少した。９，10月の報告数が少ないが一定の季節変動は見られなかった。

15歳以上の年齢層で報告があるが，20歳代が37.5％を占め最も多い。

(4)　淋菌感染症

年間報告数は37件（男性35件，女性２件）あり，前年に比べ27.5％減少した。季節性は明らかでないが，１月，９月の報告数が多かった。

年齢別では15～54歳で報告があったが，30歳～34歳，20～24歳の年齢層からの報告が多かった。

Ⅳ　まとめ

平成21年の感染症発生動向調査に基づく患者発生状況について，その動向を検討した。

平成21年３月，メキシコから始まった新型インフルエンザの流行は瞬く間に世界中に拡大し，本県では６月２日に最初の１例目が報告された。そして８月26日に定点把握対象感染症へ変更されるまでに310件報告され，年齢は20代以下の若年層が約９割を占めた。

そのほかの全数把握疾患では，特筆すべき疾患はなかった。

インフルエンザ定点からの報告数は，新型インフルエンザ（A/H１pdm）の流行により，年間報告数は前年の約４倍に増加し，流行状況も２峰性のピークを示すなど例年とは異なる傾向が見られた。小児科定点報告対象疾患では，流行性耳下腺炎が前年と比べ約2.4倍の報告数となったが，大きな

流行には至らなかった。そのほかの疾患については咽頭結膜熱，ヘルパンギーナなど一部の地区で小流行が認められたものの，ほとんどの疾患で報告数は前年を下回った。

眼科定点報告対象疾患については報告数少なく，急性出血性結膜炎の報告もなかった。

基幹定点報告対象疾患は前年と比較して大きな変化はみられず，週報告対象疾患については報告数は少なく，月報告対象疾患についてはメチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症の報告が大半であった。

性感染症定点報告対象疾患は平成16年以降報告数の増加が続いていたが，全ての疾患で前年を下回った。しかし依然20代，30代の報告が多く，注意喚起していく必要があると思われる。

今後も引き続きデータの集積を行い，来るべき新型インフルエンザの第２波流行や新興・再興感染症の流行など感染症の発生動向に注意すると共に，適切な情報提供を行いたい。